踊る女神と臨月のビーナス

土器にドキドキ

最近、縄文土器にドキドキしています。

山梨の甲府盆地から長野県諏訪地方にかけて、おびただしい数の縄文遺跡が発掘調査され、素晴らしい土器や土偶がたくさん見つかっています。

この地方は、四千年から五千年前の縄文時代中期に大いに栄え、列島では一番人口密度の高い地域でした。イノシシやシカなどの動物資源、クヌギ・カシ・ナラ・カシワのドングリやクリなどの植物資源が豊富で、この地に生きる縄文人たちの生活を支えたのです。

気候が寒冷だった旧石器時代後期までは、食料を求めて遊動しながらの生活でしたが、氷河期が終わり温暖化するとともに、中部高地にも落葉広葉樹林が発達し、定住しても食糧確保の目処がつくようになったのでしょう。

遊動生活を送っていた当時と比べ、少しは生活の余裕もできたに違いありません。煮炊きのためや盛り付けのための道具である土器は、縄文中期ともなると実用性を越えた神秘的な造形や華麗な文様が施されるようになります。

このような土器は、縄文人の深い精神性をうかがわせてくれますし、なにか安易な説明を拒否する呪術性を感じます。

私が縄文にはまったのは、地元南アルプス市の鋳物師屋遺跡から発掘された土器をひょんなことから目にしたからです。この遺跡は私の勤めている仕事場の五百メートルほど南にあり、歩いて数分の距離です。灯台もと暗しとはこのことです。

鋳物師屋遺跡から出土した土器類二〇五点は、国の重要文化財に指定されていますし、一部は数年前に、大英博物館からのたっての願いで、海を越えたロンドンまで貸し出されています。今回は二〇五点の中から特に素晴らしい有孔鍔付土器（ゆうこうつばつきどき）と円錐形土偶を紹介します。

踊る女神（ピース）

この土器は有孔鍔付土器と言います。まず土器上部の口縁部にちいさな孔が列状に空いているのが特徴です（有孔）。またその孔のすぐ下につば状の盛り上がりが取り巻いています（鍔付）。形は一般的な深鉢型の土器のように底がとがっておらず、樽型をしています。

しかしなんといってもこの土器の特徴は、人の姿のような装飾が表面に描かれていることでしょう。大きく開けられた口は何かを叫んでいるようです。太いまゆ毛も印象的ですし、両眼の下の細い曲線は涙のようでもあり、刺青のようでもあります。いずれにしても愛嬌のある顔をしていますね。

右手を上げ左手を下げている様子は踊りを表現しているのでしょうか。よく見ると両足もステップを踏んでいるような感じがしますし、つま先立ちしているようにかかとが少し浮きあがっています。私はこの土器を「踊る女神」と呼んでいました。縄文の人たちだって、時には歌い踊り、お祭り騒ぎをしたはずです。

アイヌには有名なイオマンテという祭りがあります。捕れた獲物や動物の魂を天に送り、感謝して肉や皮を余すところ無くいただくという祭です。

満月の夜、たき火を中心に踊りの輪を造る人たちの姿を思い浮かべるべきでしょうか。あるいは巫女のような女性が憑依状態で激しく踊る姿を思い浮かべるべきでしょうか。

しかし先ごろ南アルプス市が名前を募集したところ「ピース」と名付けられました。右手の指がピースサインをしているように見えることからこの名前が選ばれたようです。

臨月のビーナス

もう一つは円錐形土偶です。高さは約二十五センチで土偶としては最大級のものです。全体的な形が円錐形ですから、この手の土偶を考古学では総称してこう呼んでいますが、あまりに素っ気ない呼

び方ですので、この土偶にふさわしい愛称を付けてあげなければなりません。

長野県の尖石博物館にある国宝の土偶は「縄文のビーナス」と呼ばれています。この土偶は一見して妊娠中の女性であるように見えます。かなりお腹も大きくなっていますので私は「臨月のビーナス」と名付けました。

しかし、ピースと同じようにこれも名前を公募したところ「ラヴィー」という名前に決まりました。私の命名の方がこの土偶にはふさわしいと思いますので、以下その理由を説明します。。

お腹の真ん中を縦に走っている隆起線は、正中線だと私は推測します。正中線とはホルモンの影響によって妊娠中の女性のお腹に一時的にできる茶色い線のことです。おへそを下から支えているシャンパングラスのようなものは、胎児を支える骨盤の表現でしょうか。

体は少し「反り腰」のように見えます。このような姿勢は妊娠中の女性によく見られると思いませんか。お腹が出っ張ると前に引っ

張られる重心のバランスをとるためや、お腹の赤ちゃんを腰に乗せるような姿勢になるために「反り腰」になります。

左手は赤ちゃんを守るようにお腹に当てています。右手は腰に回していますが、妊娠中は腰痛を起こしやすいので、ついつい手を腰の後ろに回したくなりますね。

太いつながった八の字型の眉や切れ長の目、そして大きく開いた口などの表現は前の土器の顔の表現とよく似ています。

「ピース」も「ラヴィー」も指が三本です。なぜ三本なのかよく分かりませんが、縄文中期にこの地方で作られた土偶は三本指のものが他にも出ています。

もしかすると縄文人は三が好きだったのかもしれません。今の日本人だって日本三大〇〇、御三家、三人娘、万歳三唱など三つをそろえるのが好きです。

「ラヴィー」の出土状況・南ア市教育委員会より

土偶は多産や豊饒を祈る地母神崇拝のための人形と解釈されています。この土偶を造り、安産を祈り、生まれてくる子が丈夫に育つことを願ったひとりの母親のこころに思いをはせるとき、何か胸が熱くなるのを感じませんか。

鋳物師屋遺跡

これらの土器が出土した鋳物師屋遺跡は、台地の縁に近い扇状地に位置しています。工業団地建設に先立って平成四年に発掘調査が行われ、直径百三十メートルの範囲に約百四十一軒の竪穴式住居が発見されました。

このうち縄文中期の住居址は二十七軒。しかしこの二十七軒が同時にムラを構成していたのではなく、一度に存在したのは数件程度と考えられています。一軒で五〜六人家族とすれば、二十人から三

十人が一緒に暮らしていたはずです。

しかし豪雨による山からの土石流で、これらの住居は一瞬にして土砂に埋まってしまったと考えられます。今でも一之瀬川、坪川という富士川に流れ込む小さな河川がこの遺跡の近くを流れています。一之瀬の名前は「石乗せ」から来たと言われ、この地が古代から暴れ川によって何回も土石流に襲われたことは間違いあれません。

一瞬にして土砂の下に閉じ込められたため、当時の集落や人々の生活の様子がそのまま残されることになり、素晴らしい土器類が無傷のまま数多く出土したわけです。

鋳物師屋遺跡は日本有数の縄文遺跡として考古学界に知れ渡るようになりましたが、残念ながらその跡には工場が建ってしまいました。事業主が建てた説明版が遺跡の場所を教えてくれるだけです。

発掘された遺物は、南アルプス市のふるさと伝承館に展示されています。

工場敷地内に設置された鋳物師屋遺跡説明版

縄文のこころ

髪やひげは伸び放題の男が、皮のふんどし一つで、槍を持って獲物を追いかけているといった縄文観は修正されつつあるようです。山梨県立考古博物館へ行くと、縄文時代の家族の暮らしが復元され、人形が飾られています。

竪穴式住居があり、小ざっぱりした麻のシャツとズボンを身につけ、父親は石器作り、母親は土器作りをしていて、その脇に子供が遊んでいるといったような様子が再現されています。

父親のひげは何で剃ったのか、母親は虫歯で苦しんでいたのではないかなどと皮肉な想像をしてしまいますが、縄文人とてそれなりに豊かで平和な暮らしをしていた

のではないかという考えがもとになって、このような展示がなされているようです。人を殺傷する意図のある道具があまり発掘されず、刀傷などを負った人骨も少ないことから、大きな戦争もなかったと考えられています。

ある研究によれば、約一万年以上に及ぶ縄文時代の人骨を調べたところ、暴力による死亡率（殺傷率）は約1.8％で、世界の四大文明地域の殺傷率十数％と比較しても圧倒的に低いようです。

しかし貝塚などから出た骨からの推計によると、十五歳の縄文人の平均余命は十六年です。乳幼児の死亡を含めた平均寿命は十四～十五歳です（鬼頭宏著・人口から読む日本の歴史）。

従って、縄文時代をユートピアのようにいう論調には首をかしげざるを得ません。「縄文時代には豊かな自然の恵みの下、人々は平和に暮らしをしていました」というのはかなり楽観的な推測で「縄文時代は、あまりにも貧しくて、人々は争いを起こす余力もありませんでした」という推測だってできないことはありません。

また政治経済的理由だけが戦争の原因とは限りません。「他部族に馬鹿にされた」ことや「おれの女を寝取った」などということも部族間の戦争に発展する可能性があることが人類学的に証明されています。警察力や調停機関が社会に備わっていないことが要因です。

いずれにしても、自然に依拠し、自然への強い畏怖の念を抱きながら、生きていた時代です。縄文時代は祈ることしかできなかった時代ではないでしょうか。祈ることがとても大切な意味を持っていた時代ではないでしょうか。

その祈りの上に、生活があり喜怒哀楽があったのでしょう。誕生を喜び収穫の豊さを楽しむこともあれば、隣人と争い、死を哀しむこともあったでしょう。

あれから四千五百年がたちました。鋳物師屋遺跡に暮らした人々と同じ地に私はいま生活し、彼らが眺めたように富士山や南アルプスや富士川の流れを眺めています。縄文の月も今の月も変わりがあるはずはありません。

連綿と続く人間の営み、次々と世代を超えて受け継がれてきた文化が私の後ろには横たわっていることを、踊る女神（ピース）と臨

月のビーナス（ラヴィー）は教えてくれました。

fujizakura